29 歴史ドラマから探る韓国近代史と日本

期 間	28年 6月10日［金］～7月8日［金］（全5回）
応募締切	5月27日［金］
実施場所	九州国際大学地域連携センター（サテライト・キャンパス） 〒806-0021 八幡西区黒崎3-15-3 コムシティ2階（34ページ地図参照）
申込・問合せ先	九州国際大学地域連携センター 〒806-0021 八幡西区黒崎3-15-3 コムシティ2階 TEL: 631-2203 FAX: 631-2204
時 間	18:00～20:00
定 員	30名
受講料	4,000円

講座概要　実施機関: 九州国際大学地域連携センター

19世紀半ば、相次ぐ西欧列強のアジア進出は極東の小国、日本と韓国に衝撃を与えました。国を開き近代化することで危機を乗り超えようとした日本と、国を閉ざして危機を乗り切ろうとした韓国。この相反する為政者たちの選択が日韓両国の行く末を大きく左右し、韓国は日本に植民統治されることになりました。そしてこの期間は、古代から永々と営まれてきた日韓交流史の汚点として、今なお激しく議論されています。

本講座では、19世紀半ばから1945年までの期間を4期に分け、日韓の資料や歴史ドラマを参考にしながら、韓国近代史を分かりやすく解説すると共に、日韓はなぜ支配する側と支配される側になってしまったのか解明します。

月 日	テーマ・内容	担当講師
6月10日（金）	**『朝鮮ガンマン』** 第1回目は、朝鮮を近代国家に変えようとした金玉均（キム・オッギュン）に注目する。彼は1884年12月に起こった「甲申政変」の主役であり、朝鮮近代化のモデルとして日本の明治維新を手本にしようとした人物である。福沢諭吉とも親交が深く、親日派の中心人物と目されていたが、反対派によって殺害された。金玉均の思想とそれを排斥しようとした朝鮮王朝の保守性。朝鮮時代末期の混乱した政治状況について解説します。	九州国際大学 教授 森脇 喜一
6月17日（金）	**『明成皇后』** 第2回目は、悲劇の皇后「閔妃」に焦点を当てる。閔妃は朝鮮第26代国王・高宗の妃であり、「乙未事変」（1895年10月）で、日本公使らによって暗殺された。日清戦争後、日本の影響力を排除するため政府内部に親露派を形成するなど、国王に代わり積極的な外交手腕を見せたが、門閥廃止を唱えた金玉均の思想と対峙する立場にあった。中国、ロシア、日本など周辺諸国の利権が交錯する朝鮮半島の地政学的な観点を加味しながら、日韓併合へと向かう時代状況について解説します。	
6月24日（金）	1909年10月、伊藤博文がハルビン駅で暗殺された翌1910年8月に韓国併合条約が結ばれ、以後、35年間にわたる日本の植民統治が朝鮮半島で展開された。 第3回目は、併合から1919年に起こった「3・1独立運動」までの武断統治の期間を取り上げる。この時期は行政・経済・社会・文化などの面で統治基盤の形成期であり、弾圧に対する抵抗運動が頻発した。こうした時代状況について映像資料等を交えながら解説します。	
7月1日（金）	**『野人時代』1** 第4回目は、3・1独立運動以降から満州事変（1931年）までの時期を解説する。この時期、武断統治だけでは朝鮮民族を治められないと判断した総督府は、所謂、文化政治によって民族融和を図った。その結果、親日的な意識が都市部から地方へと拡散。植民統治政策が確立したとされる時代背景を解説します。	
7月8日（金）	**『野人時代』2** 最終回では、満州事変以降から日本の敗戦（1945年）までの期間を解説する。この時期、戦線を拡大した日本は朝鮮に対して戦争協力を強要し、創氏改名や韓国語使用を制限するなどの政策を執った。こうした一連の植民地政策が反日感情を高めたが、韓国の近代化を考えるうえで、日本の植民統治が果たした役割を肯定的に捉える意見も多い。賛否両論、様々な意見を紹介しながら、韓国近代史に及ぼした日本の役割をまとめます。	